＼発見！／

おごおり遺産

No.44 博愛の人 高松凌雲（たかまつりょううん）

箱館戦争のさなか、敵味方の区別なく負傷者を救った高松凌雲。古飯で生まれて190年目を迎える今年、広く知ってもらうためさまざまな取組を行っています。

高松凌雲の生涯



武器を持つ敵兵の前に立ちはだかり、「ここにいるのは武器を持たない負傷者と医者だけだ」と訴えて患者を守る、そんな勇気ある行動をとった医師がいます。高松凌雲――江戸時代末期から明治時代にかけて活躍したこの医師は、ここ小郡で生まれました。

天保7年（1836）、御原郡古飯村に生まれた凌雲は、江戸や大阪で医術を学び、15代将軍・徳川慶喜に仕える医師となります。その後幕府使節団の一員としてパリ万博を訪れ、ヨーロッパ各国で結ばれていた赤十字条約（負傷兵を敵味方の区別なく救護することなど）や、パリの病院で貧しい人々が無料で治療を受けていることを知りました。



滞欧中の凌雲
（松戸市戸定歴史館提供）

帰国後、凌雲は旧幕府軍と共に北海道の箱館（現在の函館）に向かいます。そこで病院の院長を任され、敵味方の区別なく患者を治療しました。当時の日本では考えられなかった凌雲の信念は、敵である新政府軍にも伝わったのでしょう。新政府軍が病院に押し寄せた際、凌雲は患者を守るために立ちはだかりました。その訴えは聞き入れられ、病院の安全は守られました。



凌雲生家跡と碑（小郡市古飯）

戦いの後、凌雲は貧しい人々を無料で治療することをめざし、明治12年（1879）、仲間と共に同愛社を設立しました。同愛社は各地に救療所を設けて貧しい人々を治療したほか、疫病が流行した際にも多くの患者を救いました。こうした活動は高く評価され、東京府（現在の東京都）知事から金杯を贈られたほか、天皇から一千円（現在の価値で約200万円～数千万円相当）を下賜（かし）されました。

大正5年（1916）、凌雲は80歳で亡くなります。しかし、同愛社の活動はその後も続き、大正12年（1923）の関東大震災でも救療活動を行い、多くの人々を救いました。

凌雲の思いは時代を超えて受け継がれ、現在の医療や社会福祉の制度につながっています。



関東大震災の際の同愛社罹災患者救療所
（『同愛社五十年史』より）

高松凌雲を伝える

郷土の偉人・高松凌雲を後世に伝えるため、これまで数々の書籍や冊子が発行され、顕彰会も結成されています。また、12月25日には「高松凌雲生誕祭」が開催されているほか、御原校区にある総合保健福祉センターあすてらすには高松凌雲に関する展示コーナーが設けられています。節目の年には市内で特別展示が行われ、地元のこどもたちが劇を演じたこともありました。



あすてらすの展示コーナー（小郡市二森）



御原小児童による劇

令和8年は、凌雲の生誕190年目に当たる年です。凌雲をより多くの人に知ってもらうため、実行委員会を中心に銅像の建立が進められ、記念式典も開催されます。

高松凌雲銅像除幕式

現在、功績をたたえる顕彰碑が凌雲生誕の地・古飯にありますが、凌雲の精神を未来へ伝える新たなシンボルとして、西鉄小郡駅前に白衣姿の立像の建立に向けた計画が立ち上がりました。銅像の建立を通じて、思いやりの心を育む地域づくりや福祉・医療の原点を見つめ直す機会づくり、こどもたちが郷土に誇りを持てるようにすることをめざしています。

日時　12月20日(日)10時
場所　西鉄小郡駅前ロータリー



銅像イメージ（灰塚みゆき氏制作）

※「髙」の字は常用漢字でないため、本文中は「高」を使用しています

高松凌雲銅像建立・生誕190年記念式典

銅像の建立を記念した式典が開催されます。特別記念講演のほか、オープニングでは「おごおり七夕太鼓白鷺会」による演奏も行われます。

日時　12月27日(日)13時～15時半
12時45分　開場
オープニング「白鷺会太鼓」
13時半　セレモニー「特別記念講演」
15時半　閉式
会場　文化会館大ホール
講師　横倉義武さん（日本医師会名誉会長）
鈴木俊彦さん（日本赤十字社副社長）
入場料　無料
申込　不要
問　文化財課　文化財グループ
☎75・7555

